

庭園工芸とは——庭園史と西川友孝の位置

森 仁史

日本で庭園は近世までの身分制社会では、その造営は特権階級によって独占されてきた業であった。従って、明治維新によって造園は一般に開放され、公衆の眼に触れることになった。古くは祭祀の場として、次いで宮廷の遊樂施設とし、仏教伝来後は涅槃の造形、禪宗によって悟りの境地、さらには茶の流行によって主の意趣を表現するための装置として、そしてまた近世には擬似的田園生活の空間として發達を遂げてきた。このように原初的な信仰の拠りどころであり、思弁に基づく表象世界であるからこそ、その系譜や精神性についてしばしば語られ記述されてきた歴史があった。あるいは、庭を造るのが古くから自然の素材に限られ、そのことがなお一層日本の風土を強く意識する精神性を助長してきた。もちろん、市民革命を経験してもいなければ、偕楽園のような例外を除けば公園という概念にはたどり着きようがなかった。寺社境内や野外の遊びには開かれた空間が用意されたが、都市に造園という観点から緑地を新たに造ることは外来の思想の導入されるまでは日本では未成熟であった。

明治になってから、小澤圭次郎、近藤正一、横井時冬らが「作庭記」や「築山造庭伝」、各種図会などの近世までの資産をもとに庭園を造形美術ととらえようと始めた。とくに小澤は「国華」に「園苑源流考」と題して一四一回にわたり古文獻による庭園史を整理記述し、後の基礎を固めた。また近藤『名園五十種』（博文館、明治四十三年）や小澤「明治庭園記」（大正七年）など同時代の造園について記述することにより、近代の造園に対する批評の言説が始まったといえるだろう。近代的な庭園は建築から要請される洋風庭園や都市計画に付随する公園や緑地の開設などいわばお上か

らの号令によって日本の土に蒔かれた。例えば、辰野金吾は教鞭を執った建築学科から造園のスペシャリストを育てたかったようで、それは大名庭園を中心に日本庭園の著作をまとめたコンドル譲りの構想であったかもしれない。ただし他方で、庭園が欠かせない茶や集古の趣味の世界は高級官僚や経済人といった新たな富裕層に引き継がれ、公の事業とは別個な作庭や蓄積が重ねられていた。この系統では、その懐古的趣味傾向に見合った歴史再生が幅を利かせることになるのは成り行きであった。

庭園、造園、公園、緑地など人間がその住む世界に植物や造景によってかたちづくった造型に微妙に異なる呼称が用いられていることに気づかれたであろうか。これらのなかでは庭園は新しい造語のようである。また、これらに遙に先駆けて日本は「にわ」という概念も名辞ももっていた。それが明治期を通じて交替してゆく有様を理解するうえで、上原敬二『この目が見た造園發達史』（同刊行会、昭和五十八年）が大いに参考となる。幕末生まれの上原は旧制高校在学中に古老から聞き取りを行う程には歴史の変遷に意識的であり、大正昭和と造園の実務と研究とに大きな足跡を残した。結論的にいえば、明治以降の短い時間の間に辰野の希望とは異なり、造園・林学、天然記念物（文化財）、国立公園（観光）、都市計画と系統の異なる様々な分野に分散してしまつた結果のようである。それは建築や美術と違って、学としてのヒエラルキーが不完全なまま成長してきたということだ。だから、西欧的な規範に合わせて近世の遺産を組み替える軋轢は少なかつたかもしれない。ただし、最も典型的な最初の洋風庭園が新宿御苑（明治四十年）や赤坂離宮庭園（明治四十二年）であり、これらを設計できたのが福羽逸人、小平義親ら宮内省内苑匠であったことはこの分野と天皇との位置関係を明示することになっていた。

これらの所産が乗り越えられるのが大正期であり、秋里籬島ら近世の言説を鵜呑みにしていると小澤を批判する外山英策が現れた。外山は東大農学部を卒業し、後に中世庭園史研究の權威となる。また、造園を個人レベルの表現として意識し実行しようとするものも現れる。つまり、生活改造

の波に乗って新しい個人住宅の模索と実践が都市近郊で展開されるようになったとき、それらにみあった庭をどう実現するかももちろん課題となったのだった。

大正十三年（一九二四）に上原敬二によって東京高等造園学校が創設された。すでに明治四十二年（一九〇九）にわが松戸に千葉県立園芸専門学校（昭和四年から千葉高等園芸学校、現在の千葉大学園芸学部）が創設され、ここで造園学が講じられてはいたが、造園を専門とする学校はこれが最初だった。松戸はやがて文部省の定める高等教育機関になったが、東京高等造園学校は二年制の各種学校（昭和五年から三年制）であり、造園における工手学校的な存在であった。ただし、前述の如く造園には単一のアカデミー機関が形成されなかつたので、この卒業生は都市改造に取り組み地方自治体で一線の指導者になることができた。それは大正十二年の関東大震災によって、その後の新たな都市づくりが各地で現実の課題となり、公園や並木などの植栽をどのように計画し、構成するのかに専門家を必要としたからであった。



1 『近代的小住宅』 (1930年)



2 『造園芸術』 創刊号

東京高等造園学校を昭和三年（一九二八）に卒業した西川友孝は母校

の助手を勤めながら、下北沢に七曜社建築造園事務所を営んだ。友孝は以前取り上げた西川友武の四人兄弟の末弟である。都市近郊の住まいに新しい生活を築くうえで、生活を取り巻く住宅とその環境としての庭を一体として作り変えようと、彼は庭園工芸という新しい概念を提唱した。卒業の翌年に上梓した『庭園工芸と室内装飾』（資文堂書店、昭和四年）で、「室内と庭園、この二つを離すことなく、美しい住生活を建設するやう努めやう」と呼びかけている。「庭園と居間とはもつとく接触し、室内から庭園へ、そして庭園から室内への間に、一寸の溝もあつてはならない」と主張した。同じように庭園が室内へ連携すべく、「庭園が室内に侵入した」「室内庭園」も積極的に提唱した。しかし、それらは建築と様式的一致を堅苦しく考えるのではなく、むしろ「規格品による庭園——もし、そんなものが生まれたとしたら、面白いではないか」とさえ考えた。標準化された材料による庭、つまり庭園のインターナショナルスタイルである。「それらの調和よき集合によつて、暖い、広い戸外の慰安を求める」という目的こそ根幹であるべきだという発想に基づいていた。なぜなら、住宅は「保険、衛生、便利、経済、防災等」の観点から求められるべきものであり、だから「美しく飾るのではなく、我が家を住み心地よく」することが肝要なのだから。この意味で庭園工芸は「工芸的であり、慰安的である」べきで、

その本義は「親しみ易い庭園」であるべきだったのである。

西川は同書で室内装飾の記述を進めるのに、東京高等工芸学校教授の森谷延雄と工芸図案科卒業の横山薫次の助けをかりたとしている。詩的でありつつ勤労者家庭を視野に入れた森谷の感覚に西川は賛同したのだろう。そうであつても、この書物は屋外の庭と室内のデザインを同一の視点で語ることで画期的であった。横山とはこの後も付き合いが長く、昭和五年に上梓した『近代的小住宅』（資文堂書店）（図一）の装幀をまかせた。世紀末的感覚がリリシズムに傾いている。このコンビで昭和六年二月に、造園学会機関誌『造園芸術 Landscape Art』（構成社



3 『建築・造園・工藝』創刊号 (1931年)



4 『建築・造園・工藝』第5輯 (1932年)

書房)〔図2〕が編集された。同誌は四号から独立した造園芸術社の発行となつたが、あまり売れ行きがよくなかつたらしく翌年七月を最後に休刊した。八月に一旦復刊されたが、その後は発行されなかつたようである。西川は昭和六年六月に『建築・造園・工藝』(金星堂)〔図3〕と題する季刊誌を創刊し、より十全に自らの理想を追究していく。毎号特集テーマを組み、建築では市浦健、川喜田煉七郎、工藝では高村豊周、豊口克平、造園では重森三玲、永見健一といった新進のライターを揃えた、この雑誌はその志向だけでなく、天銀、箱入りという体裁においてもきわめて破格だった。また、創刊号では本文一八〇ページに対し、当時は高価なアート紙網版口絵四十一頁三十二頁という贅沢な誌面構成を試み、この版組みはその後も維持された。これらの解説文はその口絵とは別に生まれ、「口絵と解説だけでも充分身になるといつた編集方針」を採った。雑誌は毎号特集を設定して編集され、それによつて「三造型芸術の鼎立連繫に依つて、これが特殊なる総合的新研究を目的とする」ものであった。これこそが「新時代の切実なる欲求である」と西川は認識していたからだった。『建築・造園・工藝』でも第五輯〔図4〕から横山が装幀している。ただし、残念ながらこの雑誌も昭和七年九月の第六輯をもつて廃刊となり、西川は七輯を別な発行元から計画する旨予告したが、日の目を見なかつたようである。しか

し、ここに発表された論考はその後三度にわたり編集し直され、単行本として発売されている。刊行順にあげれば次の通りである。目まぐるしくアヴァンギャルドが交替した日本の一九三〇年代にあつて、こうした再読の機会を与えられるのは西川がその時代を先駆けていたといえようだ。

『新造型芸術大観』昭和八年、金星堂

『最新建築・造園大観』昭和九年、吉田書店

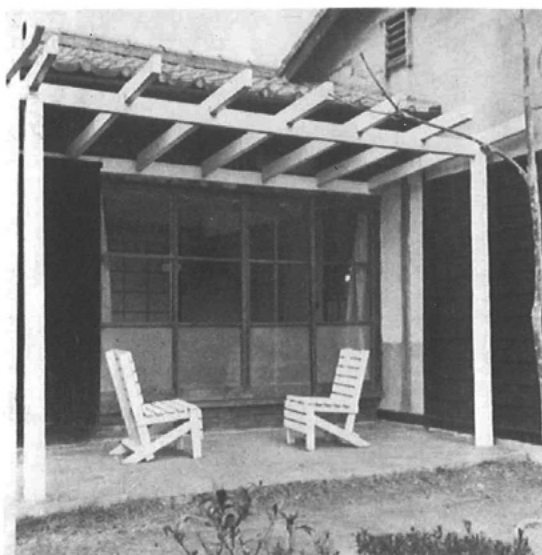
書店

『最新工藝大観』昭和九年、吉田書店

『工藝美術』昭和十一年、巧人社

『造園建築』昭和十一年、巧人社

西川はその後観光事業に興味を移し、日本交通公社に勤務したが、昭和十年頃には父の故郷である滋賀県大津に移り、戦後は滋賀県庁に勤務したようである。この頃にも『庭の造り方』(愛隆堂、昭和三十三年)と題する著作がある。このとき西川は昭和初期の自身の活動を「いずれも若気の至りといった拙いものはかりだった」と片付けている。自らは「大人になつて」と意識し、以前の著書と異なつて付け加えられたのは「名園めぐり」であった。これこそは重森三玲らが編纂した『日本庭園史図鑑』全二十四巻(有光社、昭和十一—十四年)によつて意図的に体系づけた日本の(伝統)の後追いなのではないか。西川は意識していないのかもしれないが、彼が挙げたのは竜安寺から江戸初期で止まっているか、山本春挙のように古式をなぞつたものに限られている。庭園をこうしたつくられた古典の規範に押し込め、称揚することはその流儀を家元化するには都合がいいかもしれないが、新たな生活様式から庭を発想することとは無縁にならざるを得



5 西川友孝邸（「庭の造り方」より）

ない。だが、西川はこのとき、こうした乖離を突くのではなく、名園とは全く離れた個的な「庭園の築造」を接木している。恐らく、庭園工芸は西川がここで報告しているような個人住宅における日曜園芸（図5）に追いやられ、新しい庭園は一九五〇年代以降の公共建築の急成長のなかでピロティや中庭という擬似的な公共空間の設計に囲い込まれ、もはや建築の思想的表現の随伴者としての役割しか与えられなくなったように思える。こうした道筋と枠組みは戦後日本の庭園を稔り多いものすることができたろうか。

幻のデザイナー・小林かいち（七）

山田 俊幸

《青い鳥》セット

最近、インターネット・オークションで小林かいちの絵葉書セットが取り引きされたという。絵葉書会の大坂事務所に行くと、そのオークションの紙情報をくれた人がいた。「すごいもんですねえ」と、くれながら感心している。もちろん、絵葉書会の人だから、かいちが高いということは知っているはずだが、あらためて、「異常だねえ」も含めて「すごいもんですねえ」の感想があったのだろうか。

たしかに、このところ絵葉書特に美術絵葉書と呼ばれる絵葉書は相当な高値を呼んでいて、つい最近も青木さんを招いて、『彷彿月刊』という雑誌で《絵葉書国人物誌 明治編》という特集を組み、その座談会のなかでの絵葉書の値段についてのくだりで、山田が

「絵葉書が高くなっちゃって」

と発言したら、『一寸』同人の青木さんが、

「山田ちゃん、オマエサンのせいだろう」

と指摘されたことがあった。オマエサンこと山田ちゃんは、その責任の一部は認めるとしても、オマエサンこと山田ちゃんが絵葉書を高くしたわけではないことを、ここでも分かってもらわねばならない。とは言っても、いつかの初版本ブームのように投機的な絵葉書ブームであるようなことも事実で、今年の古書組合の七夕市でのちよっとした絵葉書の目玉だった杉浦非水の絵葉書四十五枚ばかりは、一枚一万五千元以上見当で落札されたということを知った。これも異常人気かもしれない。いずれは、初版本バ

一寸

第二十七号 二〇〇六年八月

新・旧刊案内27

高崎正男の遺稿、その他いろいろ

青木 茂

第二十七号目次

新・旧刊案内27	青木 茂	1
高崎正男の遺稿、その他いろいろ	青木 茂	1
東陽堂・吾妻健三郎の仕事	岩切信一郎	7
《城沼の冬》―藤牧版画の後摺りについて13	大谷 芳久	12
北斎の霞、セザンヌの布	金子 一夫	20
かぼちゃの景色	丹尾 安典	23
江戸期銅版年表 銅・石版画遺聞23	森 登	26
庭園工芸とは―庭園史と西川友孝の位置	森 仁史	34
幻のデザイナー・小林かいち (七)	山田 俊幸	37
李朝時代の「一寸」木活字と金属活字		39
青木茂『書痴、戦時下の美術書を読む』(平凡社)の刊行		40

■近況とはいえないが去年の十月、古書会館へ行ったが「洋書まつり」とやらで待てども仲間の影も射さない。二階で桜井書店の昭和とかいう展示があつて上つてみた、桜井書店は太平洋戦争中に時局を背に、配給機構にのつていない和紙を使った美しい図書の数々を刊行した出版社で、社主櫻井均がなぜか高崎正男(天城俊彦)をひいきしていた理由を、かねて知りたかと思つていたのである。会場にはご子息櫻井毅氏がおられて、その著書『出版の意気地 櫻井均と櫻井書店の昭和』(二〇〇五年八月、西田書店)を求めたら僕の名前まで入れてサインしてくださつた。読んでびっくりした。

以下は突然ではあるがえびな書店の古書目録『書架』七十三号(二〇〇六年一月)の編集後記から抜き写す。暇名さんも驚いたのは次の一文である。父は天城俊彦著『明治初期洋画史』という原稿を大事に持っていたんです。二百字詰め原稿用紙で百六十枚ぐらい……私は遺稿だろうと思つている……

ここで僕(青木)が口を出すと原文には「序文の日付は昭和十八年十二月……父から何も聞いていなかったから今でも家に残っているのです」とある。また『書架』からの引用を続ける。

これを読んで私は櫻井毅さんにすぐ手紙を書いた。高崎正男『明治初期洋画』という本は何度も広告されたものだが、結局は出ないで終わった幻の本であつたこと。ただ昭和十七、八年の時点で明治の洋画がある程度専門に研究していた研究者は隈元謙次郎とか森口多里といった人し